

在日コリアン高齢者の在宅介護ニーズにおける
現状と課題：
日本の介護支援専門員に対するインタビュー調査

黃才榮

高齢者研究情報センター

(요약) 日本の介護支援員は、在日コリアン高齢者の在宅介護のケアマネジメントを行ううえで、どのようなニーズと処遇困難点を感じているのかという問題意識の下で、5名の介護支援員を対象に半構造化面接を行い、得られた発言の内容をカテゴリ化する手法を用いて、分析を行った。その結果、在日コリアン高齢者の在宅介護ニーズとしては、“文化配慮への期待(5人),” “家族による支援(5人),” “自立生活への意識(3人),” “生き方・生活史への尊重(2人),” “経済的な支援(1人)”の5つのカテゴリにまとめることができた。また、処遇困難点としては、“文化への理解(3人),” “介護保険制度への説明(2人),” “生き方・生活史による信頼構築(2人),” “経済的な状況(1人),” “アイデンティティ(1人)”の5つのカテゴリに分類された。この結果は、“文化配慮(5人),” “家族支援(5人)”に関するニーズが最も多く指摘された。特に先行研究の知見と同じニーズとして“文化配慮,” “家族支援,” “自立意識”の3つのカテゴリが再確認された。一方、新たなニーズとして“生き方・生活史への尊重(2人),” “経済的要因(1人)”を確認することができた。介護支援専門員は“在宅介護ニーズ”と困難

이 연구는 2010년도 財団法人 三井住友海上福祉財団의 高齢者福祉의 研究助成에 의한 것이다. 본고에 관한 일체의 서신왕래는 (우) 121-7904 서울특별시 마포구 신공덕동 167番地 MetroDioBil 910 (주) 고령자연구정보센터 黃才榮(Jae Young Hwang) 박사 앞으로 하시길 바라며, 교신저자의 e-mail 주소는 hwang7306@msn.com이다.

“点”においても、同じカテゴリとして“文化要素,” “個個人の背景要素,” “経済要素”を挙げた。この3つの要素は介護ニーズでありながら処遇困難課題であることが明らかになった。特に処遇における困難点としては, “文化への理解(3人)”が多く挙げられた。一方, 日本の介護支援専門員は, 在日コリアンの“家族支援,” “自立意識”のニーズについて困難とは意識していなかった。今後, さらにデータを集積し, 介護支援専門員の立場からの介護ニーズや困難点の具体的な実態を明らかにしたい。

[Key words: 家族ニーズ, 高齢者, 在日コリアン, 自立ニーズ, 文化ニーズ]

序 言

2000年スタートした介護保険制度は, 被保険者のニーズに応じて, 可能な限り在宅で自立した日常生活ができるように, 被保険者の選択に基づいたサービスの提供を理念として掲げている。この制度は, 日本人高齢者と同様に外国人高齢者にも, 介護サービスの利用が保証されている。よって, 介護の社会化は, 日本人社会だけではなく, 日本で暮らす外国人社会にも大きな影響を及ぼしている。それは, 多くの外国人高齢者は, 老後を支える柱として介護保険制度に大きな期待を寄せているからであろう。

しかしながら, 介護サービス利用においては, エスニックマイノリティとしての生活様式, 生活習慣, ものの考え方などの個人的・社会的な要素が日本人高齢者とのさまざまな違いとして取り上げられている(Kitwood, 1997)。つまり, 介護ニーズの違いは, 介護保険制度で重要視されている自己選択によるサービス利用において様々な問題を引き起こしている。

実際に, 介護サービスを受けている外国人高齢者は, 自分の生活ニーズとかけ離れている支援に戸惑いを感じている。他方, 現場の介護サービス提供者からは, 外国人利用者の介護ニーズに基づいたアセスメントに多くの問題があると指摘している。このような指摘は, 介護サービスの利用者と提供者との間に, 外国人利用者のための介護支援に多くの課題が横たわっていることを示唆していると思われる。従って, 在日外国人高齢者の8割りを占める¹⁾在日コリアン高齢者が持って

1) 在日本大韓民国民団中央本部: 人口推移 (2008)。法務省入国管理局(2007)によると, “韓国・朝鮮籍”が59万8,219人で, 外国人登録者全体の28.7%である。その中で, 65歳以上の人口は9万265人, 高齢化率は15.7%で, その数も男女共に65歳以上の外国人登録者数の8割を占めている(<http://www.mindan.org/toukei.php>)。

在日コリアン高齢者の在宅介護ニーズ

いる介護ニーズの特徴を、客観的に、さらには利用者・提供者、両者の視点を取り入れた多角的な分析をする必要がある。特に介護保険制度がスタートする以前から、在日コリアン高齢者(以下、在日高齢者)が多く住んでいる地域では、在宅支援介護センターなどにおいて、彼らの相談が数多く寄せられ、介護ニーズが浮き彫りとなっていた。さらに介護保険制度のスタートに伴い、日本の介護支援専門員は、在日高齢者の介護ニーズを適切にとらえ(白沢政和, 2001; 諏訪さゆり, 2007; 佐藤信人, 2004), サービスを提供することに多くの課題を抱えている。そこで、本稿では、日本の介護支援専門員が、在日高齢者の利用者に対するケアマネジメントを行う上で、感じる介護ニーズと処遇困難点について明らかにする。

研 究 方 法

予備調査

本調査を始める前に、在日3世の2名と日本人1名の介護支援専門員に対し、予備調査として本調査と同じ質問を用いた半構造化面接を行った。

対象

K市の居宅介護支援専門員協会に所属している者のうち、在日高齢者を担当した経験がある、または現在担当している介護支援専門員として研究協力の承諾の得られた5名を対象とした。

データ収集

対象者の希望の日時に、プライバシーの保護の保たれる個室、もしくは事務室にて、半構造化面接を実施した。面接では、在日コリアン高齢者の“ケースを担当するようになったきっかけ,” “在宅介護ニーズ,” “ケアマネジメントをする上での困難点”について尋ねた。面接内容は参加者の同意の上、ICレコーダーにて録音し、逐語録を作成した。データの収集期間は2009年5月～2009年10月であった。面接時間は40分から100分であった。

データ分析

まず、インタビュー内容をもとにデータを意味のある?容別に分類した上で、類似性と差異性に着目しながらカテゴリ化を行った。最後にデータを体系化するためのカテゴリに名を付けて、整理を行った。

倫理的配慮

担当職員同席のもとで調査の目的および倫理的配慮について説明し、承諾書に署名を得た後にインタビューを実施した。説明事項としては、①インタビューへの参加は自由意志であること、②インタビューへの参加しないことによる不利益は生じないこと、③インタビューへの参加に同意した後でも、収録の途中であっても、随時辞退できること、その場合でも不利益を被むらないこと、④個人情報の保護・秘密保持を守ること、⑤インタビュー内容は本研究の目的のみに使用すること、⑥調査記録は研究責任者のもとで厳重に保管することであった。なお、一部のインタビュー対象者については、事前に本人宛の協力依頼文を送付して内容を確認してもらい、インタビュー施後には質問を受けたことについて署名を求めた。

分 析 結 果

対象者属性

性別は女性が4名、男性が1名であった。介護支援専門員としての気経歴は、最も長い人で、平成12年から10年目であり、最も短い人で3年目である。これまでの処遇ケースは最も多い人で、5ケースである。その詳細は、<表 1>に示す。

“在日コリアンを担当するようになったきっかけ”について

家族からの依頼が最も多く、次に地域包括支援センターや病院からの連絡、そして前任者からの引き継ぎなどが挙げられた。また、“経歴”については介護保険

在日コリアン高齢者の在宅介護ニーズ

＜表 1＞調査対象者背景

ID	性別	介護支援専門員歴	担当ケース数	在日高齢者との出会い
1	女	6年目	2名	
2	男	10年目	4名	病院の社会福祉士の時
3	女	10年目	6名	
4	女	10年目	7名	在宅支援専門員の時
5	女	3年目	3名	

＜表 2＞ 在日コリアンを担当するようになったきっかけ

ID1	一件は、私の事務所に家族から直接依頼がありました。もう一件は、病院のソーシャルワーカーからの紹介でした。二人とも在日1世です。
ID2	たまたま担当していた人間が退職して、引き継ぐという中身です。
ID3	Aさんの場合は、最初、一緒に住んでいる娘さんから、依頼の電話がありました。Bさんの場合は在日高齢者の老人クラブに來ている人で、その人は生活保護だったんです。そっちから連絡があったんです。
ID4	この地域は、在日高齢者が多く在宅支援介護センターで働いていたの平成九年ごろには、在日の高齢者の相談を数多く受けてきた。平成九年に、病院の相談室の人から、相談を受けたのが、最初です。
ID5	どの人も皆さん家族からとか、近隣の地域包括支援センターからの紹介で来ています。

がスタートする前から在宅支援専門員として相談事業に関わっていたID4さんや介護保険支援専門員3年目のEさんなど多様であった。その結果は、＜表 2＞に示す。

“在日高齢者の在宅介護ニーズの特徴”について

在日コリアン高齢者の在宅介護ニーズに求められる特徴について、日本の介護支援専門員の5名に対する半構造化面接調査の内容から、得られた発言内

容に基づきカテゴリ化を行った結果、1) 文化配慮ニーズ(5人)、2) 家族支援ニーズ(5人)、3) 自立意識(3人)、4) 生き方・生活史への尊重(2人)、5) 経済的な支援ニーズ(1人)にまとめることができた。カテゴリの具体的な発言内容は、<表 3>に示す。

<表 3> 在日高齢者の在宅介護ニーズの特徴

1) 文化配慮ニーズへの期待

① 料理	娘さんも、“お父さん、お父さん”と言っておいしいものを一生懸命作って、持ってきてくれました。スープにしてもほとんど韓国の料理です。彼は、私には、“辛いものは嫌いだ”と言っていたのに、娘さんに聞いたら、“キムチが大好きよ”と言うので、“うそじゃん”と思いました。娘が作ってきたものを食べていました。(ID1)
	今、私の関わっている一人ですが、たまたま入院したから、彼女は、“在日高齢者のためののデイサービスに行こう。病院に一日いてもつまらないから、ちょっと行ってみよう”という話で行って、本人はすごく満足して、周りも料理なんかを作って。本人が帰りに、“せっかくここまで来たんだから、真っすぐ帰らないでくれ。金(仮名)食品に寄ってくれ”と。いわゆる、キムチとかタラの朝鮮漬けが、“どうしても買って帰る”と言っていました。(ID2)
	娘さんとは同居でした。二世帯住宅で、一階がご夫婦で二階は娘さん家族が住んでいました。食卓を見ると、赤いものが多いなという感じはあったんですが、それはケアマネジャーとして困ってはいないし、ヘルパーも、ハングルが話せなくても、オモニ(お母さん)が自分の家でキムチを漬けていたのを見ていたとか、そういうことがあるので、日本のものも食べるけれども韓国の調理も意外とスムーズにやってくれていたんで、ヘルパーの仕事自体は困っていませんでした。(ID3)
	その在日の人たちがだんだん年を取ってきて、ご飯作りをするのに、“日本食が食べられない”と言うのです。そして、“入院も嫌いだ”と言いました。なぜかかという、日本の病院のご飯はまずいうえに、キムチも持っていってはいけないと言われるから、白いご飯が食べられない”と言います。マクドナルドも食べられる人たちですが、“具合が悪いとき、心が疲れてしまったときは、やっぱり自分たちの国の料理が食べたい。でも、それを日本

在日コリアン高齢者の在宅介護ニーズ

	のヘルパーは、 当たり前だけど作れない」という話です。それがきっかけで、この地域では朝鮮料理、 韓国料理のできる在日コリアンのヘルパーを養成するようになりました。(ID4) 二人とも、 どちらかといえば、 日本文化の中で溶け込んで生活していた感じはします。 ただ、 二人ともキムチを作ったりというのはよく覚えています。何か漬けていたり、 一家言があるような、“この人のキムチは”とか、“子どもが作るキムチは”という話はよく聞きます。(ID5)
② ドラマ	○氏は、 在宅酸素(療法)だったので訪問看護の看護師も入っていました。彼は“つまらない。生きていても面白いことなんかもう何もないよ”と言っていたので彼が生きる張り合いになるような面白いことがあるといいと思っていました。そのとき、ちょうど“韓国ドラマのブーム”で、韓国のいろいろなビデオがレンタル屋にも出てくるようになったので、在日ヘルパーが、“今、こんな韓国の映画があるんだよ”と教えたことがきっかけで、彼はそれが楽しみになりました。彼が好きだったのは、韓国の時代劇です。“面白い”と言って全部見終わったときに、彼は、“楽しみがなくなった”とがっかりしていましたが、見ているときは本当に楽しかったようです。(ID1)
③ 言語	年を取ってくると、流暢に話せていた日本語を忘れます。在日のおばあさん同士だと、片言ハングル、片言日本語で、単語は向こうの言葉だけど、流れは日本語で話しているような変な会話で、私は半分もわかりません。だんだん年を取ってくると、具合が悪いときに、医者に、“こういうふうに具合が悪い”ということ、言えなくなってしまうのです。“日本語を忘れちゃうんだ”と言っていました。(ID4)
④ 遊び	この地域には在日高齢者のための老人クラブがあります。そこによく行きますが、そのおばあさんはそんなに動けませんが、普段歩けないのに、立ち上がって、踊りだします。本当に“楽しむ”ということと、おかしいときは、笑う。音楽が鳴ると、踊り出します。やっぱり日本人の高齢者と違うなと思いました。(ID4)
⑤ 生活 様式	ちょっと違う感じがします。やはり韓国の人なんだというか、そういう文化を大切に生きてきた人たちというか。飾ってあるものとかが韓国っぽい感じのものを持っているとか、椅子じゃなくて地べたに座る文化なんです。だから、椅子にあまり座らないのか、床のほうが好きなんだろうという感じがする。(ID5)

2) 家族による支援

娘さんと会ってお父さんの話をすると、彼女は今でも涙を流します。“どうしてこんなに父親を大事にするか”というぐらい、大事に思っています。Bさんも、奥さんがとても尽くしました。それは国柄です。(ID1)
ある意味，“異国”というのがあるのかなと思うし、家族で仲よくしない限りは生きていけない部分があるのかなと思います。病院に長くいたでしょう。おいちゃんが倒れたとか、おばあちゃんが倒れた、病気になった、亡くなったという場面を何回も見ている中で、皆さんのきずなは本当に強い。在日の人たちは、いろんな意味でまだ結束高くしています。(ID2)
いい意味で、親子のきずなが日本よりしっかりしていると思います。たまたま私がかかわったケースかもしれないですが、通院とか、いざという、ヘルパーができないところは家族がかかわってくれています。全部が全部そういうわけじゃないけど、韓国の人はきずなが強い人が多いです。独居でも、近所にいる息子さんが緊急連絡先になっているので、連絡が取れなくて困ったことはないです。(ID3)
年寄りを敬う気持ちが変わります。在日の高齢者は、自分は尊敬されて当たり前なんだという感じている。娘さんたちは本当によくやっていました。お金がない中で、お母さんのために、母の日や誕生日にはプレゼント。必ず自分たちが行って、料理を作って、部屋の掃除をしていました。結婚式や、孫の成人式という、着物を着せて、日本で成人式はやりませんが、なおかつ、(チマ)チョゴリを作って着せて、写真を撮っていました。家族のきずなというのは、本当に日本人よりもはるかに強い。(ID4)
家族がそれなりにいて、名前とかも“オモニ”とか呼んでいたりするから、家族間でも韓国の風習の中で生きているとは思う。また何となくサービスがいっぱい入ってくればそういうのは、もっと出てくるんじゃないかな。(ID5)

3) 自立生活への意識

二人に共通していたのは強さです。在日コリアンと日本人はどう違うのかと二人のケースを考えたとき、対照的な部分もありましたが、考えていくうちに共通するところを感じました。振り返ってみると、在日コリアンの男性は、歴史を担いながら日本で生活をして、所帯を持ち、子どもを育て、一家のあるじとして立ってきた男性に共通する、強さであり、つらさであると思いました。(ID1)
私がケアマネジャーとして今でもやり取りのある人は、皆さん、戦前辺りに来た人ですから、言葉が通じないわけじゃないです。ちょっとうまくいかないから、会話を

在日コリアン高齢者の在宅介護ニーズ

すると、“もしかして在日の人かな”と思う程度です。希望を持って、この地域に夢を見て来た人も多んじゃないかという気がします。だから、年をとってもがんばっているじゃないですか。ある意味、誇り高い。日本人は、そんな感覚はきつとない。でも、そこはずっと感じてはいます。そこは尊重するしかないと思っています。(ID2)

在日は、日本人にはない誇りの高さがあって、私はそこを尊敬しています。誇り高く、相手にこびないし、プライドが高い人が多いです。みんな、食事のこと、お年寄りを敬う気持ちが強いです。(ID2)

4) 個個人の生き方や生活史への尊重

そんなもので、ある意味、本当に同化している部分と、そうじゃないところがあると思う。やはり、在日の人たちの中に感じているのは---。“キンさん”と呼んでほしい人、“キムさん”と呼んでほしい人。逆に、日本名ももう一つ持っていて、“ヤマモト”と名乗っていたり、“カネモト”と名乗っていたり、いろんな人がいますが、そっちで呼んでほしい人。これはずっと感じていて、今でもあるんですが、本当に朝鮮民族に誇りを持っている人と、そうはいても、実際にいろんな意味で差別がある中で、知られたくない舞台の人もいれば、それはいろいろだよな。それは、その人その人です。(ID2)

自分が韓国人だからということで過去に何かあったとか、文化レベルで、韓国人だったことでいじめられたとか嫌な思いをしたとなると、“その辺に関してそういう思いはしたくない”という希望もあります。なので、その辺に関しては尊重する必要がある。“自分は韓国人だ”というものを外に、ほかの人には知られないように配慮してほしい“とか。日本名と韓国名があったりすると、”日本名のほうで呼んでほしい“とか。家族からもそういう希望が出るときはあるかな。(ID5)

5) 経済的な支援

同じ“在日”というくくりの中でも、経済的に余裕があるかないかで違います。この二人の場合、経済的な問題と家族の介護力の違いでニーズが変わってくところがありました。一人は、介護力と経済力の点で比較的恵まれていて、自分の家があり、息子と同居していました。息子は何もませんが、別居している娘が何くれとなく世話をします。もう一人は、経済的に非常に貧しい人でした。専業主婦の奥さんと同居していたので、人的な援助で言えば奥さんが全面的に担えますが、ある程度の年齢だったので、ご主人を起き上がらせること一つをとっても大変です。息子は別居しているので、具体的な介護力としては成り立たちませんでした。(ID1)

“在日コリアンに対するケアマネジメントでの困難点”について

次に“ケアマネジメントをするうえで、感じられる困難点”の内容を類似性でカテゴリ化していく手法で分類作業を行った。その結果、1) 文化への理解(3人)、2) 介護保険制度への説明(2人)、3) 生き方や生活史による信頼構築(2人)、4) 経済的な状況(1人)、5) アイデンティティ(1人)に分類ができた。カテゴリの具体的な発言内容は、<表 4>に示す。

<表 4> 在日コリアンに対するケアマネジメントでの困難点

1) 文化への理解

日本人であれば、何を指して“信用”と言うか、難しいところですが、私たちが訪問を始めて、あいさつが返ってくるまでに約二カ月かかりました。最後は、冗談を言う笑顔を見せてくれる関係は作れました。父親がとても強くて、父親の前ではたばこも吸わないとか、生活に対する認識や思想は日本人とは違うので、最低限そばはわかっていないと、とんでもないことになります。最初に訪問したときに、変に足を崩したり、あいさつがきちんとできなければ、信頼関係は絶対に作れません。最初に信頼関係をどう作るかという点でもそこは意識しておかなければなりません。(ID1)
最初に直接伺うのはとても不安で、“在日の人”と聞いて、娘さんは日本語で電話をくれたんですが、お母さんは八十いくつと言っていたので、日本語が通じるか、日本語で話していいのかわからなかったし、韓国の文化とかそういうのもケアマネジャーとして最初から不安がありました。でも、日本語も通じたし、とても受け入れがよかったので安心したのを覚えています。(ID3)
入所の件で困ったことがあります。そのAさんは、よく私に、“ここは特別養護老人ホームだけど、日本人の特別養護老人ホームじゃないか”と言いました。“でも、みんな韓国の人じゃないですか。名前だって、”Kさん“とか”Pさん“と呼んでいるじゃないですか。テイさんだって入る資格は十分あるんだから、ここに入ってくださいよ”と言ったら、“こんなまずいご飯は食べられない。毎日、韓国料理を出してくれるんだったら入ってやる。それができないんだったら、私は嫌だ。あなたはケアマネ

在日コリアン高齢者の在宅介護ニーズ

ジャーとして、私の言うことを聞かなきゃいけないんだから、韓国人がやっている韓国料理が出る施設を探せ”と言われました。結局、入所はせず、自宅でなくなりました。(ID4)

2) 介護保険制度への説明

介護保険制度も始まったばかりだったので、それまでは元気だった八十歳過ぎの人に介護保険制度を説明するのがとても困難でした。そのご主人は、後半、デイサービスにも行っていました。奥さんは、ヘルパーと、たまにショートステイを使っていました。多分、家族ではハングルで話していたと思うんですが、私が日本語で問いかけると日本語で答えが返ってきたので、さほど困ったことはなかったです。ただ、制度自体の説明は、日本の利用者でも認知症でなくても理解できない人がいます。その当時は介護保険を知らない人が多かったので、その点は難しかったです。介護保険が始まって十年近くたつので、今は浸透しています。今かかわっている在日の人は、日本名を上手に書けます。今は、“ヘルパーはこれとこれしかない”とか、“大掃除的なことはしない”とか、“家族が同居していればしない”ということを知っている人がほとんどなので、そういうのは思っていません。(ID3)

在日利用者本人の同意を得るなどに関しては、幸い、言葉とか、問題のない家族が近くに皆さんいたので、家族を介して話しをしました。読み書きができない人だと、メモを置いておくことができない。例えば、覚えておいてもらいたいために置いておくことができないので、繰り返し説明し続けるしかないが、その辺がちょっと難しかったです。日本の人だと、メモを置いて、“忘れないでね”って感じですむんですが、それができないというのがありました。(ID5)

3) 経済的な状況

デイサービスやデイケアサービスに比較的スムーズにつなげることができますが、この人は経済的に余裕がなく、一割負担プラス食事負担があってもかなり厳しくなるので、断念せざるを得ません。生活保護を受けられるレベルであったにもかかわらず、“生活保護は受けない”という考えで、自宅で、たらいにお湯を張って、一日おきに行水をしていました。それは、お金の問題だけではなくて、人を当てにしない、生活保護を受けないというのが考え方でした。介護用のベッドが必要だったので、退院時に、病院の先生からも説得してもらって、ベッドは何とか入れました。結局、

最後までベッドと車椅子のレンタルの二点だけでした。“うちにはそんなサービスを受けるお金がないんだから、受ける必要はない”と思っていました。(ID1)

4) 生き方・生活史にする信頼急構築

日本人のケアマネジャーとしてかかわったときに、二人に共通して、日本人と大きく違って難しいと思うことがあります。彼らの心に入り込めない壁があって、私も入り込めないし、彼らもそこからは出てきません。私は、生活の全面的な支援を考えたときに、彼らの生活歴やものの考え方をできるだけ知りたいと思いますが、なかなか難しい。(ID1)

どちらかというと、それは過去の問題です。あったとすれば、何か話が行き違ったときに、“韓国人をばかにしている”という言葉が出てきたり、“日本のほうがいい”と言いながらも、どこかそういう思いもあるのかなと。過去に何かあったのそういう発言というか、そういう思考になっている気はします。(ID5)

5) アイデンティティー

私が包括で担当した人ですが、その人の悩みの相談には乗ってあげられなかったんです。その人の悩みは、“私は何人なんですか”ということでした。“自分は韓国で生まれて、二歳ぐらいのときに日本に来て、韓国人の両親に育てられたけど、両親は私を日本人として育てた。そうでないと日本の社会で生きていけないと思ったから、日本人として私を育てた。だけど、お見合い結婚した相手は在日の人で、日本人じゃなかった。やっぱり私は、在日韓国人として生きていこうと思いました。しかし、嗜好の違いもあり、韓国の友達ができない。だけど、日本人の友達もいない。頼っていた夫も亡くなったし、娘たちはそれぞれ日本人と結婚して日本人になってしまった。私は、このまま自分が何人だかわからないまま死んでいくんだと思うと、とても寂しい。私はどうしたらいいんですかと、私は行くたびに聞かれました。”自分は何なんだ“という問いかけをしている人は、日本人より多いような気がします。字も書けない人たちもたくさんいますが、そういう哲学的なことを、彼女たちはよく考えるんです。もちろんそうではない人もいますが、私が担当した人は、だんだん仲よくなってくると、そういう話をするようになってくる。(ID4)

“在日高齢者の介護ニーズと認識の変化”について

今回、日本の介護支援専門員の発言内容から、在日コリアン社会に、介護保険制度10年目に伴う認識の広がりが見えてきた。また、在日コリアン1世と他の世代間の生活習慣などの変化も見えてきた。まず、介護保険制度に関する在日コリアン高齢者の認識の変化がID3さんの発言の“介護保険が始まって十年近くたつので、今は浸透している。今関わっている在日の人は、今は、”ヘルパーはこれとこれしかない“とか、”大掃除的なことはしない“とか、”家族が同居していればしない“ということを知っている人がほとんどなので、そういうのは思っていません。”から垣間見えた。また、ID3さんの“在日1世の人も、1世、2世、3世と、全然考え方も違うんです。今の在日2世、3世の人とは、約束ができますが、1世のおばあさんたちは、全くそれが通じなかった。そういう教育をされたことがないことを知らなかったから、困ったんです”の発言からは、在日世代間の生活習慣の違いなどがうかがえた。一方、ID2さんは病院勤務時から在日コリアンと長い付き合いから、“ケアマネジャーとしての付き合いの範囲でいけば、何かちょっと違うかなというふうに、私自身は感じません。”“感覚的には、名前が‘ボクさん’‘キンさん’というだけです。”などの発言が多く、困難点は聞かれなかった。

考 察

今まで在日高齢者の在宅介護ニーズについて、当事者を対象に、かつ当事者の視点において研究分析を行ってきた。それに対して、ここでは、介護を司っている日本の介護支援専門員の立場から見た在日高齢者の介護ニーズとケアマネジメントの困難点を明確にしようと試みた。その結果は、以下の3つにまとめられる。

1つ目は、“文化配慮(5人),” “家族による支援(5人),” “自立意識(3人),”の3つのカテゴリが挙げられた。特に“文化・家族”に関するニーズが多く指摘された。黄・今井(2009)の在宅介護ニーズの分析では、4領域8因子“文化(楽しみ、伝統、言語)・自立(なじみの関係、選択)・家族(家族)・居住(環境の継続性、接近性)”が抽出された。同様に介護支援専門員も“文化(料理・ドラマ・言語・遊び・生活様式)・家族・自立”の3つの要素は、在日高齢者の介護ニーズとして認識していた。特に“文化・家族”に一しては、5名の介護支援専門員全員が取り上げており、在日高齢者の最も強い特徴であると言える。一方、自立意識については、3名の介護支援専門員から“強さ,” “誇り高さ,” “プライドが高い”

などの発言があった。

2つ目は、介護支援専門員は在宅介護ニーズと困難点において、同じカテゴリとして“文化要素,” “個個人の背景要素,” “経済要素”の3つが挙げられた。この結果は、在日高齢者の介護ニーズは処遇困難課題でもあることを意味した。個別因子へのアプローチの難しさを物語っている。その中でも困難点として、“文化への理解(3人)”を挙げ、異文化に対する理解への難しさをほのめかした。

3つ目は、介護支援専門員は在日高齢者の“家族による支援,” “自立意識”のニーズに対して、困難点と意識していなかった。家族の絆や“強さ,” “誇り高さ,” “プライドが高い”などの自立意識はネガティブではなく肯定的に受け止められている。このことは、在日コリアンに対する介護支援における重要な手係りになるであろう。つまり、家族の協力を有効に活用し、自立意識を自立支援に活かす手法が重要である。一方、低い家族介護ニーズは、多くの在日世が家族意識と現状が乖離していることを再確認することができた。

本研究の限界と今後の課題

考察で指摘された3つ以外にも、介護支援専門員が新たに取り上げた“生き方・生活史への尊重(2人),” “経済的な支援(2人)”の介護ニーズや、“アイデンティティの課題”については何を根拠にそういえるのか、そのような関連があると言えるのか、明確にしきれず曖昧な点が多い。その他に、介護支援専門員から、在日コリアン社会にも介護保険に関する認識が広がりつつあること、在日コリアンの世代間には生活習慣などに違いが生じていることなどの発言があった。その真相に関しても明らかにしたい。今後、さらにデータを集積し、内容分析手法を用いて、介護支援専門員の立場からの介護ニーズや困難点の真相を明らかにしたい。最後に、本研究の限界について述べる。今回の調査対象者は、A地域の日本の介護支援専門員5名に限られ、研究結果の一般化には限界があると言える。また、インタビュー内容の分析にも細かい内容分析には至らず、発言のカテゴリ化にとどまっていることを断っておきたい。

参考文献

白沢政和 (2001). *利用者ニーズに基づいたケアプランの手引き: 星座理論を使って*. 東京: 中央法規.

在日コリアン高齢者の在宅介護ニーズ

- 諏訪さゆり (2007). *ICFの視点を活かしたケアプラン実践ガイド*. 東京: 日総研出版.
- 佐藤信人 (2004). *介護サービス計画(ケアプラン)作成の基本的考え方一試論ノート*. 東京: 全国介護支援専門員連絡協議.
- 黄才栄・今井幸充 (2009). 在宅介護における在日コリアン高齢者のニーズに影響する要因検討. *介護福祉学*, 16 (1), 39-50.
- Kitwood, T. (1997). *Dementia reconsidered: The person comes first*. Philadelphia: Open University Press.

(논문접수일: 2010년 10월 13일)

(수정논문접수일: 2010년 11월 10일)

(논문게재승인일: 2010년 11월 22일)